

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

氏名・（本籍地）	林志暎（韓国）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	乙第11号
学位授与の日付	平成28年3月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項
学位論文名	古代日韓象嵌技術の系譜 —象嵌装飾出土遺物を中心に—
論文審査委員	主査 奈良大学 教授 関根俊一 副査 奈良大学 名誉教授 西山要一 副査 奈良大学 准教授 豊島直博

【論文内容の要旨】

はじめに

第I章 象嵌技法の定義

- 1、象嵌技法の定義と用語問題
- 2、日韓象嵌研究史

第II章 金属象嵌の復元

- 1、象嵌製作の工程
- 2、製作実験
- 3、製作実験の結果検討

第III章 細線細工からみる象嵌線

- 1、細線細工からみる象嵌線
- 2、細線細工
- 3、考察
- 4、おわりに

第IV章 製作技法からみた出土象嵌遺物

- 1、調査事例
- 2、象嵌製作技法による分類

第V章 日韓における象嵌技法の系譜

- 1、韓国における象嵌技法の系譜
- 2、日本における象嵌技法の系譜
- 3、舶載、工人移動、在地技術

おわりに／付記

「はじめに」では、本論の中核をなす象嵌装飾遺物の研究が、埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣のX線透過撮影による象嵌銘の発見を端緒とする保存科学分野での研究から進展したことを述べ、保存科学を専門分野とする請求者の研究動機を明らかにする。

第I章「象嵌技法の定義と用語問題」では、様々な象嵌技法に関する申請者の基礎的理解と概念規定を行い、従来金属象嵌とは地金を鑿で彫り他の金属を嵌入することと言われるものの、狭義に「物理的に金属を他の金属に嵌め込むこと」のみならず、実際には「彫った地金に化学的な方法で他の金属を定着させること」も広義として念頭に入れるべきと説く。青銅地象嵌においては、その技法を象嵌の固定方法に基づいて「物理的なもの」と「化学的な方法によるもの」に二分し、さらに象嵌溝の形成法に、鑄造時の鑄型の段階で造った象嵌溝、鑄造後に鑿で修正した象嵌溝、鑿のみで形成した象嵌溝の3つのパターンを挙げる。また一般的な象嵌技法に包摂される①糸象嵌、②平象嵌、③ニエロ技法、④消し象嵌、アマルガム法、⑤布目象嵌について、各々の技法・工程について概略を述べる。さらに用語問題として、とくに韓国で近年、象嵌に代わって使用され始めた「入絲」のもつ意味に触れる。

第II章「金属象嵌の復元」では本論の立論に最も重要な、象嵌における諸技法を解明する方法として製作実験を行う。実験は嵌入材料としての象嵌線製作と、嵌入部となる象嵌線を彫る鑿の製作、これによって形成された象嵌部の観察結果と出土遺物に残された痕跡とを比較する方法によって、象嵌線の巻きや振りによる製作技法、あるいは蹴り彫りや毛彫りによる象嵌溝の彫法などの解明を、実物観察とともにX線透過撮影やX線CT画像の観察を並行して行う。

第III章「細線細工からみる象嵌線」では、対象とする西アジアやヨーロッパの技法について先行研究に依拠しながら、韓国、日本の象嵌遺物については文献のみならず、実物資料に基づいた検討を重視して実施する。「1、細線細工からみる象嵌線」として、百濟末期の王宮里遺跡工房跡から出土した金片・金線・金糸・金棒等を概観し、「2、細線細工」以下でそれらの製作痕の観察を行い、従来の研究成果とあわせ金細工の製作過程の推定と分類を試み、鍛造、板引き、引抜板、振り、巻き、折り、鑄造の7つに整理する。その上で製作痕の比較を西アジアおよび地中海地域、スキタイから中央アジア地域、中国、韓国、日本の事例へ拡大し、とくに直径0.3~1mmの振り、巻きによる細線が中国三燕の遺跡として有名な遼西房身、馮素弗墓出土冠飾りの細線装飾に見える製作痕と類似し、その起源が紀元前8世紀頃のギリシャ、エトルリアで全盛期に達し、黒海沿岸のクル・オバ遺跡やカザフスタンのイッシク古墳、ティリヤ・テペ4号墓出土の金装飾板の歩揺を繋ぐ金線にも使用されることを述べる。また韓半島では王宮里以前の象嵌大刀のほか、皇南大塚の金鈴、金象嵌釧に見られ、日本では6世紀後半以降の象嵌技法にのみ採用が確認されること、古墳時代後期の刀の鏢の象嵌線に振り技法が認められることを重要な見解として挙げる。さらに従来言及されてきたロシア南部のサルマタイ出土金冠→アフガニスタンのティリヤ・テペ6号墓→中国の三燕地域→遼西房身、十二臺→馮素弗墓→慶州皇南大塚、金冠塚→日本の藤ノ木古墳、あるいは房身2号金製方形板→皇南大塚→新沢千塚126号墳に至る金製歩揺の系譜に属する遺物について、金線の製作技法の観察を行ったところ、韓国の皇南大塚、金冠塚や日本の新沢千塚126号墳出土の金線製作技法は、鍛造や板引きによるものと判明し、サルマタイから房身、馮素弗墓まで繋が

る振りや巻きによる製作技法とは異なることを明らかにして従来の説に異論を唱えるとともに、日韓の出土品に振り、巻きの技法は検出されなかったことを説く。

第IV章「製作技法からみた出土象嵌遺物」では、日本の古墳時代と韓半島の三国時代の出土象嵌遺物について、大刀と鞍とに大別した上で出土事例の概略を述べる。その上で関係遺品を象嵌溝と象嵌線の二つの主たる視点から、肉眼での観察とマイクロスコープやX線透過撮影による観察を行う。「1、調査事例」はとくに三国時代の大刀を中核とし、取り上げる主な象嵌遺物は、高句麗地域の伝平安南道中和郡出土金象嵌銅魁、伝黄海道平山出土鉄製金銀象嵌壺形鐙子の2点、百済地域の瑞山副長里や天安花城里出土の大刀9点と用途不明の鉄製象嵌裝飾遺物2点、さらに咸安道項里馬甲塚ほか伽耶地域出土の大刀16点や同じく陝川玉田馬具1点に加え、天馬塚など新羅地域出土の大刀6点と馬具3点である。一方、日本における象嵌遺物についても現状を踏まえ分析を行う。対象を象嵌位置ごとに示すと刀身部象嵌大刀12点、環頭や円頭、方頭、頭椎大刀19点、柄頭、鏢象嵌事例51点、鞍2点である。結果を踏まえ「2、象嵌製作技法による分類」では、それらの象嵌溝の彫り方が蹴り彫りと毛彫りの大きく2つに分類できることを確認する。とくに韓半島においては、高句麗の出土遺例がいずれも蹴り彫りのみ、百済、新羅、伽耶では、蹴り彫りと毛彫りが共用され、中でも新羅における蹴り彫り技法の出現が、他地域より若干遅れる傾向を見出す。さらに日本における蹴り彫りの事例は、奈良東大寺山古墳出土中平銘鉄刀に早く出現するが、それ以降は年代の離れた7世紀代の遺物に稀に確認できるのみであることを述べる。象嵌線に関して韓半島では、巻き技法と判るものが咸安道項里馬甲塚出土品に初見し、6世紀代に盛行する。日本では6世紀前半に現れ、6世紀後半から7世紀前半にかけて盛行する。しかし象嵌が早くから見られる百済地域において巻きや振りによる金線が認められないことは留意すべきで、この背景に北方の高句麗を考えるべき可能性を説く。一方、新羅では、象嵌技法の出現が百済や伽耶よりやや遅れる傾向にあるが、折り線の技法など、地域的特徴というべき事例も確認する。

第V章「日韓における象嵌技法の系譜」では前章の象嵌溝と象嵌線に関する考察を承けて、その源流を中国や広くオリエントに博捜し、韓半島の高句麗、百済、伽耶、新羅および日本の出土遺物に見られる象嵌技法の系譜を考える。「1、韓国における象嵌技法の系譜」で隣接する中国における関係遺品の考察を進め、「2、日本における象嵌技法の系譜」で日本に所在する遺例との関係を考察。蹴り彫りを用いた象嵌溝は、前漢代の江蘇省徐州市銅山県駝竜山出土建初二年銘金錯鉄劍(AD77年)、山東省蒼山県出土永初六年銘金錯鉄刀(AD112年)、四川省天廻山三号崖墓出土光和七年銘十煉書刀(AD184年)に認められ、いずれも鉄地に施される。高句麗地域出土の遺物からも少例ながら認められるが、新羅地域では出現が若干遅れる。百済、新羅の両地域では蹴り彫り、毛彫りともに年代差なく共に検出される。日本においては、東大寺山古墳出土中平銘鉄刀が鉄地象嵌による遺例であるが、これを除くと7世紀に至るまで事例は確認できない。一方、毛彫り技法による象嵌溝の形成事例は、紀元前5～4世紀頃のロシアのフリッポフカ出土の鉄製劍身・斧頭に見られる象嵌品まで遡るが、これに日韓出土遺物との直接的な関連を求めるのは年代や地域的な隔たりを考慮すると即断できない。しかし毛彫り技法が全般的な金工技術の伝播にともなって、北方ルートを介して伝来したとする推定はほぼ大過ないものとする。象嵌線については、巻きや振りといった技法を中心に言及が可能である。遺物に即する限りギリシャ、エトルリアに端を発し、イッシク古墳、ティリヤ・テペ、内モンゴル達茂旗、遼寧省房身、喇嘛洞、馮素弗墓、甜草溝M1号へと至り、その延長上に、高句麗をはじめとする韓半島の諸国があり、最終的に日本列島へ伝播したと考える。ただし従来象嵌技法の系譜論で根拠とする皇南大塚、金冠塚、藤ノ木、新沢千塚126号墳出土の金製歩揺連結線には巻きや振りによる象嵌線は認められない。このことは従来の系譜論に再考を促すもので、むしろこれらの技法が韓半島においては6世紀から7世紀に、日本では6世紀後半か

ら7世紀代に出土する象嵌遺物において盛行することに留意すべきと説く。

「おわりに」では、各章における要点と成果がまとめられる。

【審査内容の要旨】

本論文の要旨は上記のとおりであるが、これに対する審査委員会委員の意見をまとめると以下のようになる。

まず全体に関わることとして、豊富な実査を含めたデータが存在するにも関わらず、図版等による示し方が一定でないことが挙げられる。とくに複数の事例を比較対照させる場合には、図版の要所を丸囲いや矢印などによって指示する工夫を凝らすべきであろう。論旨の必要に応じて表の提示など工夫があってもよかつたのではないか。

各章についての主たる意見として、まず第I章では、本論で中心的に扱う日韓の象嵌技法を考察する前段階として、古代オリエントも含めた象嵌技法の伝播を通した様々な技法について言及するが、対象が広範囲の地域に及ぶため、対象地を地図に提示する等の配慮が必要である。また主要な金属工芸技術、象嵌技法についての概念規定を行うが、記述の中でたとえば「金板」と「金箔」など、同一の工程によって形成されるものについて、用語間の差異を明確にし得ていない例が散見される。重要な用語の概念規定とともに注意を払う必要がある。

第II章では古墳時代の象嵌技術を理解するために、請求者が行った製作実験の分析と実物観察、さらにそれらをX線透過撮影によるフィルム観察やX線CT画像の観察によって2次的なデータを得て、実際の遺物より得られた同様のデータと比較することで技法の実体に迫ろうとする。請求者の新たな研究視点の提示が見られ高く評価できる。しかしここで重要なことは、遺物に見られる当初の技法や工程を厳密に求めることなく、あくまでも遺物から得られたデータが、どのような技法・工程によって製作された試料の製作痕と一致するかという技術論に基づいている点にあり、その観点で本論にはやや饒舌な記述が見られる。

第III章では、申請者の示した観察視点に基づいて「細線技法」に関する具体的な考察が展開される。既出論文を挿入しているため、「4、おわりに」のような節立てに唐突さが見られる。ただしここで論じられる、日本の古墳時代後期における刀の鏢の象嵌に、振りの技法による象嵌線が用いられたとする指摘は、鏢への象嵌は銀象嵌技術の拡大や普及と理解されてきた従来の日本考古学の見解に対し、その背景に系譜の相違を含む重大な転換があることを明らかにした点で大きな成果といえる。なお、本論において重要な用語である象嵌線の製作技法としての巻きや振りの語については、記述の上でやや煩瑣な印象があり、何らかの新たな術語を申請者自らが提起する必要もあろうか。

第IV章では、韓国と日本において申請者が調査・分析した象嵌遺物のデータに基づく検討結果が中核をなしている。調査対象は韓国、日本の事例で約150点に及び、とくに考察の中で、巻きや振り技法が確認できた銀象嵌大刀が、日本では6世紀後半以降に属する円墳、横穴式石室から大半が出土すると指摘は、日本における象嵌技法の系譜を探る上で重要な示唆となる。本論では、調査に基づくデータは、末尾に添付された簡略な表のみであるが、説明を補完するためにも適宜図表を掲出することでより強い説得力を与えられたのではあるまいか。

第V章では、前章までの考察を基盤としながら、日韓における象嵌技法の系譜を主眼とした考察が進められ、さらに関連する考古資料や文献史料の博搜に努め、総合的な把握が行われる。とくに巻きや振りによる金線象嵌は、韓国では慶州皇南大塚出土品など新羅の遺物資料に見られるものの百濟地域では少ないこと。日本では6世紀後半以降に認められ、とくに東日本の古墳出土刀装具に多く認められるこ

とを述べながら、請求者はそれらの系譜として、新たに高句麗からの技術的な影響を想定する。この説は、従来の考古学的研究でほとんど指摘されなかったもので、斬新かつ注目すべき問題提起を含むものであるが、高句麗の関連遺物が僅少である点で今後の検討を待ちたい。また、高句麗からの影響については、考古学における装飾付大刀研究とは必ずしも整合しない部分があり、今後課題を残した。さらに関連する象嵌遺品として注目すべき兵庫県箕谷2号墳の戊辰年銘鉄刀、福岡県元岡G6号墳出土の庚寅年銘鉄刀などの資料に触れるところがあれば、さらに論拠を補強できたのではないかと考える。

総じて本論文は、製作実験によって得られたデータと広範囲に渡る実物資料、X線フィルム等の観察との比較を行う、斬新で意欲的な研究であり、日韓の関係資料を豊富に調査・検証して、象嵌技術の系譜を辿ろうとする姿勢は高く評価できる。とくに象嵌金属線の製作技術に視点をおき、実証的に事象を捉えようとする方向性や、従来の考古学や文献史学の研究成果にも配慮した立論は、成果に一定の説得性を与える背景として見逃せないものといえる。

【最終試験の結果】

林志暎の学位請求にかかる最終試験については、審査委員会の関根俊一（主査）、西山要一（副査）、豊島直博（副査）の3名が、平成28年1月7日、本学大学院棟において実施し、学位請求論文と英文要旨をもとに口述試問の形で行った。その結果、林志暎が博士の学位を受けるに十分な学識を有することを確認した。

【審査結果】

審査委員会は、学位請求論文の審査結果、及び最終試験の結果から、本論文は博士（文学）の学位を与えるにふさわしい業績と判断する。